

氏 名 飯 田 淳 子

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第642号

学位授与の日付 平成15年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 「タイ式医療の構築とタイ・マッサージ

-社会的文脈による権威的知識の多様性-

論 文 審 査 委 員 主 査 教授 長野 泰彦
教授 田村 克己
助教授 宇田川 妙子
教授 小野澤 正喜 (筑波大学)
助教授 白川 千尋 (新潟大学)

本論文では、医療システムを所与の実態とするのではなく、社会的に構築されるものとする視点に基づき、タイ・マッサージに関する権威や正当性が、国家レベルとローカル・レベルの様々な場面において、いかなる場面において、いかなる形で構築されているかを明らかにした。

タイ・マッサージの歴史的正当性を裏づける史料として一般に用いられているのは、17世紀後半から20世紀初頭までの間に残されたとされる、宮廷医達のテキストや外国人による記録である。この時期はタイで西洋の影響が顕著になった時期でもあり、まさに国民国家形成及び西洋近代医療の導入とともに「タイの伝統医療」なるものが形成されてきたといえよう。しかし西洋近代医療の影響力が強まっていく中で、伝統医療は次第に制度的に周辺的な位置に押しやられていく。そして1960年代以降、タイにおいて性産業および観光産業が発達する中で、タイ・マッサージは売春の隠れ蓑、あるいは観光アイテムとして昨日する側面を持つようになる。他方、70年代半ば以降、国内の医療従事者を中心として伝統医療復興運動が全国的に展開し、その中で、副作用があり高額な近代薬の代替療法として、生薬およびタイ・マッサージの役割が再評価されるようになる。また、90年代からはタイ政府が「タイ式医療」という新たな医療システムを制度化し始める。その際、宮廷医達を中心として編纂されたテキストが歴史的権威となり、それが近代医学的観点から検証され、体系化され、基準が作られている。

以上のような国家レベルでの背景を抑えた上で、第3～5章では北部の中心都市チェンマイの伝統式病院におけるタイ・マッサージについて記述した。当初、周辺地域の土着の治療法を多く取り入れて治療活動をおこなっていたこの病院では、チェンマイで近代病院が増加するに従い、生き残りのための戦略としてタイ・マッサージを採用した。この病院で働くマッサージ師たちは、賃労働者としての側面を持ちつつも、専門的職能者として自らを規定し、観光産業などのマッサージ師たちとの差異を強調する。一方、クライアントには「健康」志向の都市中間層や外国人観光客が多く、彼らは近代医療の限界を指摘しつつ、医療専門職によってある程度管理・統制されたものを望んでここに来ている。この病院では、近代医療や農村における治療、観光産業などとつながりを持った形で「治療」活動が行われる一方で、それぞれとの差異が強調されることにより、タイ・マッサージが複数の領域で機能しているからこそ強調される差異であるといえる。

伝統式病院の教育・普及活動において、タイ・マッサージの正当性はより顕著な形で再生産される。マッサージ習得コースの生徒には、「東洋」志向の強い欧米人や外国志向の強いタイ人が多く、彼・彼女らはともに「何かタイ的なもの」を身につけたくてここにマッサージを習いに来ている。それらの人々の要望に応えるために、習得コースでは近代学校教育的な形式を採用しており、それによって教えられる知識は画一化され、授業で習うことが「正しいやり方」とされる。また、この伝統式病院は国の中央で構築された「伝統」に則り、タイ式医学の祖を頂点とした「師」の権威を再生産している。それはかつてこの病院の活動に加わっていたチェンマイ近郊の治療師達の実践様式もとりこんで、ここ独自の形式となっている。さらに、外部向けのマッサージ研修および農村での奉仕活動を通じて、伝統式病院の外部に広くタイ・マッサージの正当性が普及される。

一方、治療の場面では、教科書のやり方ではなく、クライアントからの評価を得られるかどうかの方が重要となり、マッサージ師の経験的な知識の方に権威が付与される。そして、マッサージ師の個性を反映した独特なやり方が生み出されていく。マッサージ師達が紡ぎ出す実践は、国家レベルで構築されている正当性からずれた形で、多様な「タイ・マッサージ」を再生産しているといえる。

こうして主に都市中間層の間で権威を確立しつつあるタイ式医療、タイ・マッサージは、プライマリー・ヘルス・ケアの中に位置づけられようとしており、全国各地に普及されている。第6・7章では、その影響を顕著に受けている、チェンマイ県メーチェーム郡Y村におけるマッサージについて記述した。日常生活において、村人どうしで行われるマッサージ(ビーブ・セン)は、タイ・マッサージとは技法が異なるのみならず、病因論の中での位置づけやそれが行われる社会的文脈が異なっている。村人たちは呪術など複数の治療法の間で注意深く試行錯誤を繰り返しながら痛みの原因を解釈し、その中で「エン」の異常によって痛みが引き起こされていると判断された場合にマッサージによる治療を選択する。また、村人同士のマッサージは、村における社会関係の文脈の中に埋め込まれている。そして産婆など村のマッサージ治療者は、その技能を認められているだけではなく、社会的にも敬意を表すべき年長者として位置づけられている。

最近まで開発の波にさらされてこなかったとされるメーチェーム郡、特にY村では、医療従事者や研究者、NGO等によって「土着の知恵」を開発に活かしていこうとするプロジェクトが行われている。その一環として郡立病院で行われたタイ・マッサージの研修は、それに参加した村の年配女性に対する技法の普及という面では、ほとんど効果を持たなかった他方、この研修を受けた若い男性治療師は、その後病院で働くようになり、自らの慣習的行為に新たな意味・意義を付与するようになる。また、上記のプロジェクトの一環で、Y村には「民間医療センター」なるものが作られ、それは医師や保健職員が村の治療者の実践様式を近代化させる活動の拠点となっている。そこは医療サービス、観光サービスとしてマッサージが行われ、タイ・マッサージの正当性が再生産される場でもある。しかし、そこで村人たちが行うマッサージは村の病因論や身体技法などに引き寄せられ、中央で構築されているタイ・マッサージとははずれたものとなっている。

国家レベルにおけるタイ式医療とタイ・マッサージの構築は、国民国家統合や医療化という大きな流れの中に位置づけることもできる。しかしローカルな実践の場において、人々はそのような権力作用にさらされつつも、それに一方的に従属するのではなく、国家レベルで構築されている権威とは違った形の、それぞれの社会的文脈に即した権威を生み出しているのである。本論文は、このような医療システムの生成を多面的に重層的に論じたものである。

論文審査結果の要旨

本論文は、タイ・マッサージに関する権威や正統性が、国家レベルとローカルレベルのさまざまな場面において、どのような形で構築されているかを明らかにした研究である。

医療人類学および権威的知識に関する人類学理論の先行研究の批判的検討をふまえ、問題の所在を明らかにした第1章をうけ、第2章において、まず、タイ・マッサージの歴史的・制度的背景について論述している。それは、西洋近代医療の導入とともに、現代までに「タイ式医療」がいかに制度化されていったか、その中でタイ・マッサージが再評価されていった過程を明らかにしたものである。

続く第3章から第7章にかけては本論文の中心をなすところであり、チェンマイ市の伝統式病院における「治療」活動を通じた正統性の再生産、教育・普及活動を通じた正統性の再生産、マッサージ師の熟練過程、及び北タイ農村の日常生活におけるマッサージ、農村における医療・観光サービスとしてのマッサージの誕生、に関して、精密なフィールドワークにもとづく記述と分析がなされている。現代タイの都市と農村それぞれにおいて、タイ・マッサージがいかに展開しているかが、現地調査による豊富な資料にもとづいて記述され、これらの論述をもとに、現在のタイにおける国民国家統合や医療化といった国家レベルでの権力作用を一方でこうむりつつも、ローカルな実践の場においてはそれぞれの社会的文脈に即した権威が生成されていると結論づけている。

本論文は、今日世界各地で活発化している非西洋医療の再編や新たな視点からの評価といった動き、あるいはそれらの裏づけとなるプライマリー・ヘルス・ケアの概念を、タイを舞台に跡づけようとしたものである。プライマリー・ヘルス・ケアの普及に伴う非西欧的医療の動向を扱った論述の多くは、主として薬草など動植物起源の素材を用いた病気への対処法や伝統的な出産介助術に着目したり、これらの技術の担い手である民間治療者や伝統的産婆に焦点を当てたりしてきた。本論考のように、マッサージという身体技法を扱ったものは少なく、その意味で本論文は貴重な記述分析といえる。さらに、伝統医療や民間医療といったカテゴリーの概念形成過程と、身体的実践との関係について論じている点も、独創的である。この点は、言説と身体という、ひとり医療人類学の次元にとどまらない、より広い人類学上の理論的テーマに連なっていくものであり、その領域を拓くものとしても、本論文の学術的意義は大きい。

現地調査の対象を都市の伝統式病院と農村の2ヶ所としたことが、両者の資料の質的差異やつながりについての議論をやや複雑にした面があるものの、本論文の議論の展開に多角的あるいは重層的な広がりをもたらしており、意欲的な試みといえよう。それは近代と伝統、都市と農村、ナショナルとローカルといった単純な二項対立的図式を、現地調査そのものから見直そうとする可能性を秘めており、ジェンダーの問題等も含め、本論文がより大きな課題につながることを示唆している。そして、本論文は権威的知識とそれを使う主体等についての分厚い記述において高く評価されるものであり、先に述べた独創性や学術的意義と合わせて、博士の学位を授与するに価すると判断される。